じゃりみち

····被 災 地 支 援 情 報····

第 115 号　発行日 2019.7.4

被災地 NGO 協働センター
〒 652 - 0801　神戸市兵庫区中道通 2 - 1 - 10
TEL:078-574-0701　FAX:078-574-0702
HP:http://ngo-kyodo.org/
Facebook:https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO
E-mail:info@ngo-kyodo.org
口座番号 :01180-6-68556(郵便振替)

2019 年基本方針

「何でもありや！」のボランティアが社会を変える

昨年の寺子屋のテーマは、「ボランティア 2 年目はあるのか？」というものでした。1 年間をかけて合計 5 回の寺子屋を実施してきましたが、まずはボランティア元年のことも考えなければ話がよくわからないと思います。

ボランティア元年は、阪神・淡路大震災が起きた 1995 年を指していることが多いです。1995 年には阪神・淡路大震災だけでなく、地下鉄サリン事件という衝撃的な出来事が起こりました。阪神・淡路大震災では、ボランティアによる見ず知らずの他者同士の助け合いがかつてない規模で展開され、一方の地下鉄サリン事件では、全く見ず知らずの他者を巻き込む犯罪行為が行われた、というところに時代の中の 2 つのベクトルがある、と昨年の寺子屋の中で宮本匠さん（兵庫県立大学減災復興政策研究科）は指摘しました。それは、他者同士の助け合いによって数多くの被災者が救われるというポジティブな面と、他者は何をするかわからない、脅威をもたらす存在というネガティブな面があるということです。

ではボランティア 2 年目とはどのような時代なのでしょうか？阪神・淡路大震災から 24 年が経ち、社会ではますます閉塞感が広がり、一人ひとりの孤立化が進んだ時代となっています。このような厳しい時代に、より良い社会を作り出す希望として、ボランティアがあるのではないかと考えています。実はその希望の萌芽は、阪神・淡路大震災に見出すことができるのではないかと思います。

阪神・淡路大震災では、みんなのため、社会のため、という漠然としたものへ向けられていたボランティア活動だけでなく、たった一人を救いだそう、被災者一人ひとりに向き合っていこうという個人に焦点を当てた活動が重要であるということに気づきました。効率化を進めたシステムの中では抜け落ちてしまう被災者がいるということも阪神・淡路大震災の教訓の一つです。そうした取り残された被災者を救うのは、たった一人に目を向けるボランティア活動であるということが認識されたのではないでしょうか。一方で、他者（ボランティア）という存在のネガティブな面を見ると、何をするかわからない怖い存在として感じてしまうことがあります。こうした怖さを軽減するためには、ボランティアを管理して、自分で見える範囲の中に収めてしまうということが有効でしょう。しかし、この方法では、被災者の真のニーズには辿りつかないばかりか、ますます抜け漏れが起きてしまうでしょう。

抜け落ちてしまった被災者を救うのは、システムや制度にとらわれないボランティア、つまり「何でもありや！」のボランティアなのではないでしょうか？何でもありや、のボランティアは、阪神・淡路大震災の際に、当センター顧問の村井が使った言葉です。この「何でもありや！」という言葉には、「（被災者のために）何でもありや！」という意味が込められていると思います。

被災者の支援を行う活動は、昔に比べて随分と数が増え、様々なシステムも作り出されてきました。一方で、被災地ではいまだに解決していない問題も山積しています。阪神・淡路大震災から 25 年を前に、もう一度システムだけでは解決しない問題をどう解決するかをみんなで議論する必要があります。そして、一人ひとりを大切にする社会を創り出さなければなりません。そのためには、システムに依存しすぎない、たった一人にこだわり続けるような、「何でもありや！」のボランティアが必要なのです。そして、そのボランティア活動がどのように社会を変えていけるのか、模索していきたいと思います。

被災地 NGO 協働センター　代表　頼政良太

2018年度事業報告

【事業内容】

1. 寺子屋事業

2018年度は「ボランティア2年目はあるのか」とテーマを設定し年5回の寺子屋を実施した。寺子屋での学びについては、じゃりみち114号を参照。また、大阪北部地震の発生を受け、番外編寺子屋を開催した。

5/31 災害ボランティアセンターの変遷とその役割
講師：福島真司（兵庫県社会福祉協議会）
8/1 被災者に向き合う法・制度支援とは？
講師：津久井進（一人ひとりが大事にされる災害復興をつくる会）
8/28 災害時の中間支援の役割
講師：飛田敦子（認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸）
10/22 災害時の障害者支援の現場から
講師：八幡隆司（NPO法人ゆめ風基金）
1/15 ボランティア2年目はあるのか？
講師：池内真菜実（神戸学院大学学生）
宮本匠（兵庫県立大学減災復興政策研究科）
村井雅清（被災地NGO協働センター）

番外編寺子屋
6/28 緊急企画！大阪北部地震を振り返ろう寺子屋

2. まけないぞう事業

岩手県中心に「まけないぞう」事業を展開。現在の作り手の人数は46人となりました。

8年目を迎えた被災地では、いまだ避難生活が続いています。復興住宅での孤独死も昨年は過去最多となってしまいました。再建した人たちも近隣とのコミュニティづくり、再建の遅れから孤立感が広がっています。

また、作り手さんの中には、いまだ仮設住宅での暮らしが続いている人もいます。年々年老いていく人たちの体調の変化は避けがたいものとなっています。
作り手さんの以下のメッセージから、まけないぞうが被災者を支えていることが伺えます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まけないぞうさんに出会って5年余りになります。

あの大震災から7年も過ぎ、その後も世界中のどこかでさまざまな自然災害が発生しています。その度にあの災害時に皆さんから支援して頂いた有りがたさが身にしみていて、今の私に何ができるのか考えさせられました。

やはり、皆さんに笑顔が届けられるまけないぞうさんです。これからも続けたいと思いますので、よろしくお願い致します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

このように8年が経過したいまもなまけないぞうを必要としている人たちがいるのです。

今年度は各地で災害が相次ぎ、まけないぞうの活動が思うようにできませんでしたが、以下のようなメッセージを添えてタオルをいつも送ってくれる支援者がいます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大阪北部地震、西日本豪雨と大きな災害が続き、追い打ちをかけるように日本中が猛暑にあえいでいるようです。神戸はいかがですか？東日本大震災も含めこの暑さの中の仮設や避難所での生活は大変だろうと察します。タオル、少しですが送ります。（神奈川県より）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

このように、「一本のタオル運動」を通して、支え合いの輪が広がっています。

・2018年度実績：2,925頭出荷（うち子ぞう・親子ぞう・リングぞう・カップルぞうは664頭）
・2018年度3月末現在までの累計約27万7000頭

3. 災害救援事業

1）国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 災害発生時の対応

2018年度は熊本地震への支援を継続して行った。現地団体である西原村rebornネットワークを通じて集落再建支援などを展開している。西原村rebornネットワークの主要な事業部分を当センタースタッフが担いつつ、現地の方々との連携を進めながら村内の連携事業などを行った。

2017年7月に発生した九州北部豪雨水害においても地元団体である「ひちくボランティアセンター」の運営をサポート。「ひちくボランティアセンター」は年度末で活動を終了し、引き続きNPO法人リエラに業務を引き継いだ。当センター代表の頼政はNPO法人リエラの理事として引き続き継続したサポートを行うこととなった。

6月に発生した大阪北部地震について、震災がつなぐ全国ネットワークと連携し、高槻市などの現地での調査、施設での足湯ボランティアの実施等を行なった。

7月に発生した平成30年7月豪雨災害では、兵庫県丹波市、岡山県倉敷市真備町、広島県坂町での支援を行なった。丹波市、真備町についてはボランティアバスを実施。多くの方に参加いただいた。広島県坂町については、兵庫県立大学減災復興政策研究科災害支援チームとの連携

を進め、避難所の運営サポートや環境整備、足湯ボランティアなどの実施、仮設住宅やみなし仮設住宅の支援などを実施した。(現在も継続中) なお、ボランティアバス事業については、公益社団法人CivicForceとのNPOパートナー事業として実施、その後生活協同組合コープこうべとの共同プロジェクトとして実施しました。また、広島県坂町の支援は、公益社団法人CivicForceとのNPOパートナー事業として実施しました。

(D) 南海トラフ巨大地震に対して

・静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練

2018年度で第14回目となる東海地震に備えた「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」でのネットワークには引き続き関わっている。県外メンバーとしてプログラム作成のためのワーキンググループ (WG) にもスタッフの頼政が参加した。

・ひょうごボランタリープラザ「第1回大規模災害を想定した災害ボランティア連携訓練」への参画

2018年度は、ひょうごボランタリープラザが実施する「災害ボランティア訓練」に企画段階から参画し、講師等を担当した。

2) 海外災害に対する緊急救援活動とその後の復興へつなげる支援活動

当センターはCODE海外災害援助市民センターの事務局をサポートしながら、震災の経験を伝え、痛みの共感をし、お互いに学び合い、海外の災害救援を通して、支えあいの輪を広げてきた。

・ロンボク島視察

10/30~11/5 (増島)

4. 提言・ネットワーク事業

(A) ボランティア2年目の模索

寺子屋事業を通じ、ボランティア2年目について議論を行なった。内容については、じゃりみちを通して発信をした。

(B) CODE未来基金国内研修

年2回の研修を予定していたが、災害発生等があり年1回の実施となった。

CODE未来基金国内研修

11/25 広島県坂町での実施

(C) 復興ボランティアブックレット作成事業

震災がつなぐ全国ネットワークのつな基金を利用しての実施を予定していたが、災害多発により延期し、2019年度から実施を始める予定。

<関係団体・グループとのネットワーク>

・しみん基金KOBE/ 副理事長
・震災がつなぐ全国ネットワーク / 団体会員・事業担当役員
・人と防災未来センター / 事業評価委員
・日朝兵庫友好の会 / 常任委員
・CODE海外災害援助市民センター / 理事
・9条の会ひょうご
・社会福祉法人野花会 / 評議委員選任委員
・おおさか災害支援ネットワーク
・たつの女性が担う地域防災塾
・伝統木造技術文化遺産準備会
・西原村rebornネットワーク
・全国災害ボランティア支援団体ネットワーク / 避難生活改善専門委員
・災害救援ボランティア活動支援関係連絡会議
・社会福祉法人太陽の会 / 評議委員
・緊急災害対応アライアンス「SEMA」

(その他)

神戸大学非常勤講師/神戸学院大学非常勤講/福井大学非常勤講師/福井大学医学部医学科非常勤講師/神戸女子大学非常勤講師

5. 広報事業

会員間の連携と協働の充実を図るとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行った。

・じゃりみち 3回発行 (各約800部)
・FBなどのSNSも利用しながら情報発信を行っている。

6. その他

(A) 脱原発24時間リレーハンガーストライキ

2012年度から継続して脱原発ハンガーストライキを「原発が停止するまでやり遂げる覚悟」を持って今日まで続けてきた。

2019年度事業計画

■事業概要

1. 寺子屋事業

今年度の寺子屋事業は、阪神・淡路大震災から25年に向けた検証、そして将来世代へとつなげていくための提言を作成していくための寺子屋とする。ざっくばらんに意見交換を行いながら、個別のテーマについては講師を招いてお話を聞く機会をつくる。

2. まけないぞう事業

昨年度同様に、東日本大震災の被災地では、歳を追うごとに高齢化、格差の広がり、仮設住宅の統廃合や人口流出、再建後の孤立やコミュニティの崩壊、従前のコミュニティとのつながりの欠如など課題が多く浮き彫りになってきている。再建後、張り詰めていた緊張の糸が切れ、家族を含め体調の悪化を訴える人が多く見受けられる。それに高齢化が拍車をかけ、状況が深刻化し、今年度も被災者がまけないぞうを必要とする日がなくなるまでは継続する。

3. 災害救援事業

阪神・淡路大震災や東日本大震災などの経験やこれまでのつながりを生かしつつ、災害時には迅速に対応できるよう、災害が発生した地域の特性に合わせて活動を行う。

熊本県阿蘇郡西原村での支援活動は、今年度も継続し、定期的に通いながら他の被災地との交流等を実施する。2017年の九州北部豪雨災害については、日田市で新たに立ち上がったNPO法人リエラに関わりながら、災害救援事業からネットワーク事業へと移行していく。さらに、平成30年7月豪雨での被災地での活動は、コープこうべとの連携によるボランティアバス事業を継続するとともに、広島県坂町において、地域支えあいセンターの支援および、仮設住宅やまちづくりの応援等を実施していく。また、これまでのつながりのある地域とは、つながりを継続していく。

将来予想される大災害（南海トラフ巨大地震や首都直下地震、火山噴火など）を念頭に、事前に顔の見える関係づくりを進めていく。

海外での災害発生時にはCODE海外災害援助市民センターの事務局をサポートする。

4. 提言（アドボカシー）・ネットワーク事業

今年度は寺子屋事業を柱にしつつ、阪神・淡路大震災25年を迎える2020年1月に将来世代に対して、何を伝えていくのかを担い手となる将来世代と共に提言する機会を設ける。

また、震災がつなぐ全国ネットワークと協力し、復興ボランティアブックレットの内容等について協議する。（作成は来年度を予定）

5. 広報事業

昨年同様、機関紙やHP,FB等で広報活動を行っていく。

6. その他

(A) 脱原発リレーハンストを継続する。

(B) 基本方針に合致すると思われることにおいても可能な限り取り組む。

■事業内容

1. 寺子屋事業

(A) 阪神・淡路大震災25年に向けた寺子屋

月1回程度開催する（4月から）

第1回「災害時の違和感を考える」

日時：4月22日 18:30～20:30

第2回「違和感の元の課題解決を考える」

日時：5月29日 18:30~20:30

2. まけないぞう事業

(A) 東日本大震災支援の継続

現在、作り手さんは46人（岩手県、宮城県、 兵庫県）。今年で仮設での作り手さんはゼロになる予定です。それぞれに自宅の再建は果たしますが、くらしの再建には程遠い。これまでと変わらず寄り添いを続けていく。

(B) 広報・販促に関して

今年度の販売目標は、5,000個。昨年は災害が続き、思うように販売をのばすことができなかったので、今年度も同じ販売目標で、広報や販促につなげていく。

マスコミなどにも積極的に働きかけ、販促につなげる。これまでつながりのある個人・団体を丁寧にフォローしていく。HP、SNS、チラシやリーフレット等関連資料の更新を行いながら、販売強化に努力する。

3. 災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 災害発生時の対応

これまで築いてきた震災がつなぐ全国ネットワークとの関係や公益社団法人Civic Force、新たなに築いた企業・大学・支援団体とのネットワークなどを活かしながら、災害発生時にはすばやく被災地へ入り、人間復興へつながることを意識しながら活動する。

(B) 復旧・復興支援事業

・東日本大震災支援の継続

まけないぞう事業を通して、引き続き神戸からのサポート体制を行っていく。また、福島県の状況については、これまで通り注視していく。

・熊本地震支援の継続

2016年4月に発生した熊本地震で被災した西原村での支援活動を継続。引き続き西原村rebornネットワークのサポートを行い、他の被災地との交流事業などに力を入れていく。

・九州北部豪雨（日田市）支援の継続

2017年に発生した九州北部豪雨の被災地である日田市

でで新たに立ち上がった「NPO法人リエラ」の支援を行う。地元メンバーへ協力し、今後の災害発生時などに円滑な連携が取れるような連携を継続する。今後は、ネットワーク事業へと移行し関係を継続する。

・平成30年7月豪雨支援の継続

2018年に発生した平成30年7月豪雨の支援を継続する。岡山県真備町では、生活協同組合コープこうべと連携した災害ボランティアバス事業を継続する。広島県坂町では、地域支えあいセンターの運営サポート、仮設住宅やみなし仮設住宅のコミュニティ支援、地域でのまちづくり等のサポートなどを兵庫県立大学減災復興政策研究科と連携して実施する。

(C) 将来の巨大災害に備えて

・静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練

静岡県で行われる災害ボランティアのための図上訓練に参加し、日頃からの顔の見える関係を築いていく。

・ひょうごボランタリープラザ「大規模災害に備えた災害ボランティア連携訓練」への参画

昨年度に引き続き、兵庫県での災害ボランティア訓練へプログラム企画の段階から参画し、将来に向けた兵庫県内の支援の仕組みづくりに関わっていく。

・水害に備えた体験型学習会の実施

水害後の被害を体験できるように、床下の模型を用いた研修会を実施する。(ひょうごボランタリー基金助成金に申請中)

6/8 床下模型作成

6/16 水害対応ボランティア研修会(兵庫区社協との共催)

2) 海外災害に対する緊急援助活動とその後の復興へつなげる支援活動

(A) CODE海外災害援助市民センターとの連携・協力

例年通り、海外での災害発生時にはCODE海外災害援助市民センターの事務局のサポートなどを行う。

4. 提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

(A) 阪神・淡路大震災25年の検証と提言

寺子屋事業を通して、阪神・淡路大震災25年の検証を行う。また、その議論を踏まえ1月にはフォーラムを開催し、25年の教訓を提言する。

(B) 復興ボランティアブックレット作成

昨年度実施できなかった復興ボランティアブックレットの作成に向けた取り組みを実施する。ブックレット作成委員と共に年2回の協議を行う。(震災がつなぐ全国ネットワーク・つな基金を活用)

＜関係団体・グループとのネットワーク＞

・しみん基金KOBE/副理事長
・震災がつなぐ全国ネットワーク/団体会員・事業担当役員
・人と防災未来センター/事業評価委員
・日朝兵庫友好の会/常任委員
・CODE海外災害援助市民センター/理事
・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会
・9条の会ひょうご
・社会福祉法人野花会/評議委員選任委員
・おおさか災害支援ネットワーク
・伝統木造技術文化遺産準備会
・西原村rebornネットワーク
・全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)/避難生活改善専門委員
・災害救援ボランティア活動支援関係連絡会議(兵庫県)
・社会福祉法人太陽の会/評議委員
・災害緊急対応アライアンス「SEMA」
・NPO法人リエラ/理事

(その他)

神戸大学非常勤講師(村井)/福井大学非常勤講師(村井)/神戸女子大学非常勤講師(村井・頼政)/神戸学院大学非常勤講師(村井)/神戸こども専門学院(村井)

5. 広報事業

(A) 通信「じゃりみち」の発行

年3 回の発行を予定

(6月/10月/3月)

(B) Facebookの利用

引き続きFacebookでも情報発信を行う

(C) メールニュースの配信

これまで通りメールニュースを配信する。

・ハンストニュース
・まけないぞうがつなぐ遠野物語
・その他関連ニュース

(D) マスコミへのアプローチ

阪神・淡路大震災25年へ向け、マスコミへ積極的に働きかける。

6. その他

(A) 脱原発リレーハンストの継続

2012年6月14日～引き続き原発がゼロになるまでリレーハンストを継続する。

(B) その他

基本方針に合致すると思われる活動は可能な限り取り組んでいく。

*詳細については、HPをご参照ください。

阪神・淡路大震災から25年を迎えるにあたって

2020年1月17日で、阪神・淡路大震災から25年を迎えます。この25年の間に、大きな災害から小さな災害まで数え切れないほどの災害が起こりました。こうした災害のたびに同じような問題が繰り返されています。例えば、増え続ける災害関連死。災害関連死は、災害の直接の影響（家屋の下敷きになった、土石流に巻き込まれたなど）ではなく、その後の生活環境などの影響で持病の悪化等により亡くなってしまった方の事です。災害のたびに増え続けており、熊本地震では直接死の4倍以上の方が災害関連死で亡くなっています。避難所の環境が劣悪なことが原因で災害関連死に至ることも少なくありません。阪神・淡路大震災から24年が経過しても、避難所の環境はあまり改善できていないのです。障害のある方は、避難所に避難することが困難で、厳しい環境であると知りつつも壊れた自宅に留まる選択をする方も多いです。

このような災害時の課題は、どうして起きるのでしょうか？なぜ解決しないのでしょうか？災害時の課題は、災害特有の課題ではなく、災害前から地域の中、社会の中で抱えている課題が顕在化してくることである、ということはよく知られています。もちろん、「避難所」という空間は災害時に特有のものです。しかし、避難所という閉鎖された空間という考え方ではなく、人々の生活スペース、暮らしを行なっていく場であると考えた時に、その中で起きる問題は、日常の課題と直結していることがよくわかるはずです。

こうした課題を解決するためには、日常時からの価値観を転換していくことが必要です。そのためには、災害を経験した人たちだけでなく、経験をしていない人との議論が重要だと考えています。より自分に引きつけて考えていくためにはどうしたら良いのか。災害時に一人でも多くの命を救うにはどうしたら良いのかを、日常生活の気づきや体験と引きつけながら、これからの社会を担う将来世代と考えていくことに、課題解決の糸口があるのではないかと考えています。

当センターの2019年度の寺子屋は、阪神・淡路大震災25年に向けた取り組みとして考えています。日常時からの価値観を変化させていくためには、お互いの意見をぶつけ合う議論の場が必要だと考えています。これまでに、災害時の「違和感」をキーワードに様々な意見交換を行なってきました。その中で、「違和感」にも人それぞれの感じ方があるということがわかってきました。「違和感」を感じる人もいれば感じない人もいる。こうした違いを乗り越えていくことも、災害に強い社会を築くためには必要不可欠です。

今後も1ヶ月に1回のペースで議論を重ねながら、阪神・淡路大震災25年から新しい一歩が踏み出せるような、そんなメッセージを発信したいと考えています。ぜひみなさんもその議論の輪に加わっていただき、将来世代とともに新しい社会を作っていきましょう。

（頼政良太）

2018年7月豪雨から1年

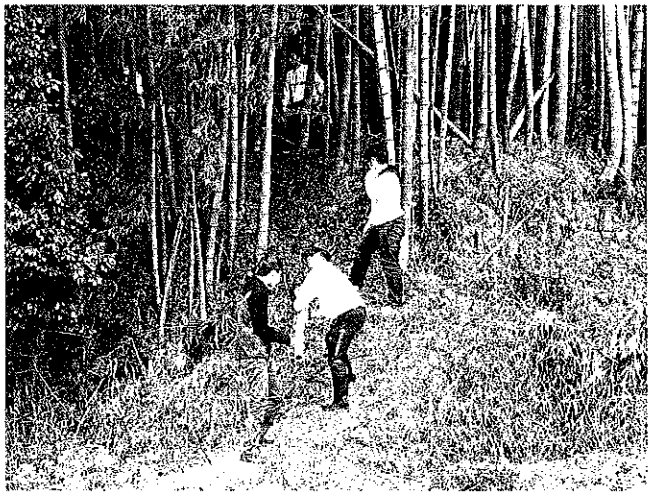
岡山県倉敷市真備町の被災地を最初に訪れたのは、被災から3週間ほどが経過した8月5日。まだ家の中に泥が残り、町は砂埃が舞っている状況。そんな中、約30名がボランティアバスで被災地を訪れました。

真備は特に古く大きな家屋が多く、また高齢者世帯も多いため、再建を諦めて移住する方も少なくありません。最初に真備を訪れた際、一人の被災者に出会いました。その男性は疲れきった様子でボランティアと一緒に作業されていました。酷暑の中、早朝から深夜まで家の片づけをして、寝るためだけに避難所へ帰るという自身がいつ倒れてもおかしくない生活の中で、ボランティアに気を使う姿が思い出されます。

当時、ボランティアセンターでは一人ひとりの被災者に目を向ける余裕がなく、現場に入ったボランティアが被災者の様子に目を向けなければ、被災者の男性のしんどい状況に誰も気が付かない状況でした。目の前の被災者に目を向ける、ボランティアの役割を改めて考えさせられました。

先月6月20日、コープこうべのボランティアバスにコーディネーターとして同乗し真備町を訪れました。（コープこうべ主催のボラバスはこれで4回目。）氾濫した小田川の決壊箇所の修復工事はかなり進んでおり、すべての家屋の解体に2年かかると見込まれていますが、作業は少しずつ始まっています。一方、浸水地域では窓や扉が開け放たれている家が多く、被災者はその家で住み続けることを諦め、解体を待っています。復旧が進むにつれて一目見ただけではなかなか被災したとわかりづらい町ですが、そこに住んでいた方の多くは倉敷市街や岡山市など遠方の仮設住宅、みなし仮設へと移り、なかなか真備まで帰ることができずに家の片づけや竹林の手入れなどに手をつけることができません。

▼たけのこ林の整備



これまで、ボランティアバスに随行する形で発災直後の家屋の泥出しや壁材撤去、端材集積所の清掃、地場産業であるたけのこ林の整備、被災の写真洗浄など様々な活動をしてきました。一つひとつの作業から被災者の真備への想いやこれまでの生活が伺えます。ボランティアバスの参加者の中には長く作業できないことに申し訳ないと言う方もいらっしゃいますが、「私でもできる支援があった」とまたボランティアに携わることを決める方もいらっしゃいました。

▲写真洗浄

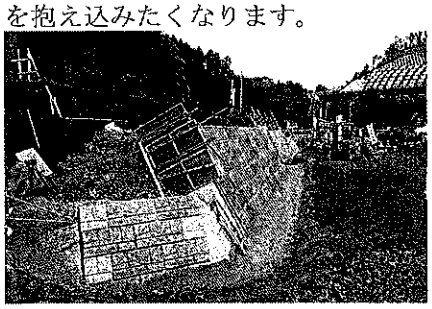
1年が経とうとしている真備ではボランティアセンターの受け入れ日には50名近いボランティアが来ているそうです。写真洗浄など住民の方の思い出を取り戻す作業が行われている一方で、浸水した真備の中心地は、昼間に町を訪れてもガランとしています。何度もボランティアを受け入れしていただいている「お互いさまセンターまび」を設立されたNPO法人「岡山マインドこころ」の多田伸志さんらは少しでも多くの被災者を真備町に戻すために東奔西走されています。真備が復興していくには、まだまだ長い時間がかかります。少しでも真備に活気を戻すためには、ボランティアの力はこれからも必要とされています。引き続きご支援をよろしくお願いします。

（CODE海外災害援助市民センタースタッフ 上野智彦）

熊本地震から3年、西日本豪雨水害から1年・・・

2016年4月14日の前震と16日の本震が起きた熊本地震から3年が経った被災地を訪れました。昔は「災害は忘れた頃にやってくる」といいますが、昨年のように災害が相次ぐと、熊本のことも忘れられ、話題が少なくなってしまいます。

しかし、いまだ被災地では建設型仮設とみなし仮設住宅などの避難生活をしている人が、1万6519人（4月現在）います。また、家を建てるための擁壁などの工事が始まりつつある一方で、手つかずの状態のままのところもあります。長期化する避難生活の中で、西原村では今年の夏に仮設の集約が始まります。コミュニティがバラバラになり、再度コミュニティを作るのは一苦労です。先の見えない中での仮設の引っ越しは不安を隠せません。心理的にも想像以上の負担がかかり、これまでも被災地で体調を崩し、孤独死や自殺などの災害関連死となった被災者がいます。被災地で幾度となく繰り返される惨状に何とかならないものかと頭を抱え込みたくなります。



▲建設途中の擁壁

久しぶりに訪ねたお宅では、家族総出で唐芋（さつまいも）の選別や植えつけのための苗を切り取る作業をしていました。いよいよ植えつけの準備です。思い起こせば、3年前の4月に地震が発生し、その片付けに追われる最中に、唐芋の植えつけの時期にぶつかりました。もちろん家の片付けもしなくてはならないのですが、唐芋農家にとっては、この時期に苗を植えないと一年間の収入が途絶えてしまい、暮らしの再建には唐芋の苗を植えることが欠かせない大切なことでした。そこで、西原村では西原村農業復興ボランティアセンター（後に「西原村百笑応援団」と改名）が立ち上がり、農業に特化したボランティア活動が行われました。また、生きがいとしての農作業を支えることは何より被災者の励みとなりました。（＊ボランティアセンターでは、原則農業などの生業支援はしていません。それは農家の利益にのみつながるという偏った活動をしてはならないという理由です。）

中には、今回の地震で農家をあきらめかけようとしていた人もいましたが、ボランティアのお陰で、農業をもう一度やり直そうとした人も少なくありません。

▲唐芋の苗の準備

また、先述したように熊本地震では、関連死が直接死の4倍となり、仮設住宅での孤独死はこの3年間で28人になってしまいました。熊本日日新聞（2019/04/16）では「内訳は、自治体が借り上げて提供するみなし仮設住宅が最多の22人、建設型仮設が4人、市営住宅などが2人となっている」と伝えています。圧倒的にみなし仮設が多いのです。このことは、住み慣れたところを離れ、人の繋がりもなく、転々ばらばらに住んでいるためボランティアも関わりにくいということから孤立していることが伺えます。

どこの被災地でもそうですが、避難所から仮設、仮設から復興住宅や再建した自宅など、仮設から仮設への引っ越しもあります。このように何度もコミュニティを作らなければならないことは、想像以上のストレスとなり、ボランティアも減少し、コミュニティづくりのきっかけも減り、孤立した状況になっていくのです。そのような「孤独な生」を回避するためには今後も長期的な支援が必要です。

西日本豪雨水害から1年・・・

6月16日、広島県安芸郡坂町の仮設住宅で「ようようひろば　カンタン！家具作り」を行いました。「コミサポひろしま」主催で兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科と当センターがお手伝いさせて頂きました。懐かしい顔ぶれに話も弾み、みなさんの笑顔に元気を頂きました。「久しぶりだったね。どうしてたの？元気だったの？」とこちらが聞く前に、たくさんの声をかけて頂きました。仮設には畑も出現していて、夏野菜のキュウリやなす、トマト、カボチャ、冬瓜、ゴーヤなどが植えてありました。土を掘り返して、石ころをだし、鶏糞や牛糞を入れ畑を作ったそうです。そこに育っていたキュウリ2本を頂き、塩までお借りして食べたみずみずしいキュウリはとっても美味しかったです。

▲仮設の畑

木工教室では、広島県西部木材青年協議会さんにご協力を頂き、組手什（くでじゅう）という木製の組み立てキッドを用意してもらいました。当日は、同協議会のメンバーの小城六右衛門商店さんらが駆けつけてくれました。仮設に暮らす大工さんや違う地域に住む被災者の方、地元のボランティアさんたちと作りました。途中で、「あれ、ちょっとにわか雨が降ってきた」というと、仮設の住民さんがブルーシートを持って来て、屋根を作ってくれて、「あー、手が届かない」というと、脚立が運ばれてきます。「あー丸ノコがない」というと丸ノコが出てきて、「あーイ

ンパクトドライバーが・・・」というとインパクトドライバーが出てきます。「あーガムテープがない」というと、もういいかげんにしなさいと言われそうですが、住民さんに助けられ、支えられて開催できました。

大きな植木を置く台から、三段ボックス、トイレの棚、飾り棚、スパイス置き、玄関の棚などなど仮設のみなさんが自分の家に必要な棚など思い思いのものを作りました。

大工さんに指導して頂きながら、みなさん夢中になって作っていました。

▼お母さんのてづくり棚

もう支援者と被災者という関係ではなく、お互いに助け合いながらの一日でした。というか助けてもらってばかりだったような（汗）。

お陰で、たくさんの笑顔をみることができました。翌日、仮設のお部屋では早速、出来立てのほやほやの棚が使われていました。

住民さんたちは、また次の「ようようひろば」も楽しみにしています。ボランティアって活動の内容がどうこうではなく、活動を通して人と人とのつながりが豊かになるところに大きな意義があることを、あらためて痛感した“ひととき”でした。

広島県安芸郡坂町では先日第2回目の住民説明会が行われたそうです。市内の数か所に災害復興住宅と20ヶ所近い砂防ダムが建設予定です。復興住宅では当初予定より入居希望者が増えたようです。

この1年近くでそれぞれの思いが変わるのは当然です。住民さんに話を聞くと、当初予定より工事の計画が伸びていて、「『いつまで』」という期間を提示してくれたらいいのに」という声を聞きました。なかなか工事が日程通り進まないのはどこの被災地でも一緒で、いつも被災者の人たちにしわ寄せがいきます。これだけ各地で災害が多発している状況では、復旧・復興には時間がかかるとあらためて実感しました。

それぞれの被災地で「最後の一人まで」を大切にしながら活動を継続していきますので、みなさんのご支援・ご協力をお願いします。

（増島智子）

＊「ようよう」とは坂町の方言で「ありがとう」という意味です。

■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動してくださるボランティアさんを随時募集しています！初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

CODE 当センターの姉妹団体「CODE海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願いします。

■編集後記

私はしばらく実家に戻ることになりました。この間NGOでお世話になり、いろいろな人の生き様に接してきました。私事で恐縮ですが、私の母のことを書こうと思います。

『丁寧に生きる』

今年の1月に父が亡くなりました。10年前に小脳出血で倒れてから、母は自宅で約10年父と過ごして来ました。話すこと、食べることなどができなくなり、病院での生活も考えたのですが、「病院はほっとできないよね」と、父が家で過ごせるようにと先生からご飯、薬、リハビリなど1日に何をいつしたらいいかなどを聞き、雪深い飛騨の地でともに歩んできました。母がほっかほかのいい温度のタオルで顔を丁寧に拭いた後の父の気持ちよさそうな顔は、今でも思い出します。そして、季節を感じられるようにと、窓から母が育てたお花が見られるようにベットの位置を変えながら外を一緒に眺めていました。父と母が過ごした時間を振り返りながら、「丁寧に生きる」ということを、私は教わったように思います。

（ボランティアスタッフ　柚原）

■入金・カンパのお願い

被災地NGO協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によろしくお願い致します。

★団体会員　年会費￥10,000　×　1口以上
★個人会員　年会費￥3,000　×　1口以上
☆団体賛助会員　年会費￥10,000　×　1口以上
☆個人賛助会員　年会費￥3,000　×　1口以上
☆自由選択会員　年会費￥　任意の額

■郵便振替　加入者名：被災地NGO協働センター
口座番号：01180−6−68556

■ゆうちょ銀行
支店番号：一一九（イチイチキュウ）支店／店番：119
当座 0068556 ／受取人名：ヒサイチNGOキョウドウセンター

■クレジットカードでのご寄付
クレジットカードでも会費やご寄付をしていただくことができます。下記URLもしくは右のQRコードからお願いします。
https://www2.donation.fm/kobe117ngo/form.php

ぞう通信。

第64号 2019.7.4

発行所：被災地NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/

来年で阪神・淡路大震災から25年を迎えます。「まけないぞう」は23年になります。こんなに長く続くとは想像もしていなかったのですが、みなさんに支えられここまで歩んでこれました。これからも「まけないぞう」を必要としてくれる人がいる限り続けていきたいと思います。

今年も無事に総会を終えることができました。正直とても厳しい財政状況であることが明確になりました。「まけないぞう」事業では、岩手県、宮城県、神戸市など現在46名の作り手さんを抱えています。昨年は、西日本豪雨災害の対応で、「まけないぞう」の販売も伸び悩みました。けれども、作り手さんの手を止めることはできません。「まけないぞう」の作り手さんは、いつもタオルが届くのを楽しみ待ってくれています。最近は、災害が起こると「また、どこか被災地に行っているのかと思っていたよ」と気にしてくれています。

そして、全国から届くお手紙を大切にファイルに入れて保管しています。「応援してくれているんだね」「私も何か役に立てれば・・・」「皆さんに笑顔を届けられるぞうさんを・・・」「この材料が届くと、また“頑張ろう”と思えます」など「まけないぞう」を通して、被災地から恩返しをしています。

▲神戸の作り手さん

作り手さんから届いたメッセージです。

「青葉の候で、気持ちも晴れやかな日々です。復興の工事も終わりのほうなのですが、今は目の前の工事です。高い堤防ができ、道路が整備されることになっていますが・・・・。」

「梅雨の頃まで、喘息のため、体調の良くない日があります。流れる空気もだいぶよくなりましたが、工事、工事でほこりが多く大変ですが、なんとか生活してます。久しぶりのぞうさん作り、楽しかったです。ありがとうございました。」

東日本大震災の被災地では、再建が進み、作り手さんも復興住宅や自力再建など、いま現在では仮設住宅に暮らしている人は残すところ一人になりました。先日、様子を聞いたところ、「やっと基礎ができてね。まぁここまで待ったから、ゆっくりで今年中にできればいいかなと思っているんだよ」と、なんだか少し声がやわらかな感じに聞こえました。これまでは土地の造成の工期が何度も伸びて、先の見えないやり場のない怒りを感じながらでしたが、やっと前が見えてきた安心感を電話越し感じました。8年経ってやっとです。避難所から仮設、仮設から仮設へ、8年目でやっと自分の家に住めるようになるのです。やっとです。彼女が住む陸前高田市では、かさ上げした土地の7割で土地の利用の見通しが立っていません。そんな場所でコミュニティが成り立つのかが心配です。他の地域でも、新しく造成した住宅地で30軒近く家が密集しているのに、ご近所さんとの交流がないとこぼしている人もいました。どこの被災地でも、一度壊されたコミュニティを再建するのはとても大変なことです。「まけないぞう」は「最後の一人まで」をモットーに被災者のそばに寄り添い続けます。

この間も「まけないぞう」のご注文を頂いたり、タオルも届けていただきました。東日本大震災からご支援頂いている「makenaizone」という応援団のみなさんがいます。そのつながりで「まけないぞう」を手にした方からご注文をいただきました。その「まけないぞう」にはメンバーの版画家さんが、ご厚意で特別に作って下さったポストカードが付いていて、快気祝いにそのポスカードをつけてほしいとご注文をいただきました。makenaizoneを通じてご縁がつながったようです。makenaizoneのみなさんありがとうございます。まけないぞうの輪がまた一つ広がりました。

makenaizoneのHPはこちらから
http://www.makenaizone.jp
FBとTwitterもありますので、覗いてみて下さい。 （増島智子）

▲版画家さんのポストカード

▲神戸に届いたタオル

「まけないぞう」のご注文と材料となる新品のタオルをお待ちしております！！どうぞよろしくお願いします。